



ASTRONOMICAL OBSERVATORY PROFILE

兵庫県立西はりま天文台公園

住所／兵庫県佐用郡佐用町西河内407-2
tel.0790-82-3886 (天文台)

開園時間／9:00～21:00
天文台見学／9:00～18:00

2004年11月に完成した「なゆた望遠鏡」は日本最大。その反射鏡は直径2mで、一般公開用では世界最大を誇る。天文台公園には宿泊施設が完備されているため、宿泊して気軽に宇宙の楽しさに触れることができる。また天文台は兵庫県立大学の研究所も兼ねており、最先端の研究と教育普及が両立する貴重な場所でもある。



りょうけん座 子持ち銀河 こと座 リング星雲 いて座 三裂星雲 こぎつね座 亜鈴星雲

天文台は星を肴に人間を語る場所。



に興味を持ち始めたのは、小学5年生頃でした。昔はクーラーもTVも無く、夏は外で夕涼みをするのが日課だった。で、たまたま近所に星に詳しい方がいて、いろいろ話を聞かせてくれた。それがきっかけですね。

高校時代には「大学で天文学をやろう」と決めていました。図書室の本や雑誌の大学受験案内から天文学の先生を探し、片手紙を書いた。そうしたら香川大学の三沢先生から「一緒に観測しよう」と返事を頂いたんです。それが香大を選んだ理由ですね。

大学に入って良かったことの二つは、興味の範囲が広がったこと。天文学は物理や化学等、色々な分野と密接に繋がっている。今まで天文しか頭になかったのが、各分野の専門の方と熱く語る機会を得たのは大きな宝です。

もう一つはかけがえのない人間関係が築けたこと。もうすぐ卒業だけどまだ勉強したい。しかしお金はない。悩んでいたら鉱物学の先生が10万円もの大

金を用意して下さいました。それで東北大学の研究生になった。先生には感謝しています。その後東北大の縁で大阪市立電科学館へ。17年務めた後、兵庫県から県立天文台建設計画参加のお誘いを頂き、退職して準備室に入りました。

やがて天文台長として計画の最前線に立つたんですが、単に星空を観望するだけの施設にはしたくなかった。同時に研究費をつけ研究もできる、教育と研究を両立する、全国にない施設にしたいと考えました。幸いこの考えにご賛同頂き、最先端機材と、生涯学習に情熱を持つ人材を確保、90年のオ

ープンにござ着けました。次の目標はより大きな望遠鏡。「できたばかりなのに、もう新しい望遠鏡の話をするのか」と皆さん驚かれたと思います。とにかく人に会う度に大型望遠鏡の話をしていました。しかし言い続けてみるもの、10年かかりましたが2m望遠鏡の計画が動き出しました。地道な研究や教育・普及の実績が認め

られたようです。そして2004年「なゆた」完成。CCDカメラなら宇宙の果て近くまで観測可能です。より暗い星、つまりより遠くにある星を観測できるということは、より宇宙の過去(昔)を調べられるということ。天文学は、我々がどこから来たのかを解き明かす学問。人間も地球も太陽も元は同じ材料。人体を構成する物質は星が作り上げたもの。宇宙は我々の故郷。元は同じ仲間だのに戦争や差別はむなしい。ぜひ平和教育にも繋げたい。

博物館や天文台は、日本では子供用の施設という意識が強い。この施設には星に全く興味が無い人にも来て欲しいと思っています。来て頂ければ、宇宙のおもしろさ、本質に触れ興味を持つてもらえるはず。それが施設存在意義。知識の伝達だけでなく、人の心に印象を残せる場所に。ここは勤労者のための施設ですから、お酒も飲めますし(笑)。星を肴に一杯どうですか？

兵庫県の山中に位置する「兵庫県立西はりま天文台公園」。日本最大の「なゆた望遠鏡」を有するこの天文台公園の園長・黒田先生は、香川大学教育学部のご出身。同時に兵庫県立大学の教授も務めておられます。巨大望遠鏡での宇宙研究と教育・普及についてお話しを伺いました。

なお、先日冥王星が惑星から降格となり、惑星が8つに減って太陽系が小さくなったというイメージがあるようですが、そうではありません。海王星よりも遠方、つまり冥王星軌道付近に多くの天体が見つかるようになり、冥王星よりも大きな天体も発見されて、太陽系を整理し直す必要が生まれた。冥王星の仲間は沢山あって、冥王星はその代表となったと見るべきでしょう。新しい太陽系の姿が描かれようとしているのです。天文学が常に進歩している証とも言えるでしょう。



新たな発見を目指し、日々研究が続きます。

PROFILE

くろだ たけひこ
兵庫県立西はりま天文台公園園長であり、兵庫県立大学の現職教授。専門分野は天文学・星間塵研究。昭和44年香川大学教育学部地学研究室卒業。

黒田武彦

FACILITIES
PROFILE

香川大学農学部
附属農場

香川大学農学部附属農場は、さぬき市北西部にある約17ヘクタールの傾斜地に立地しています。農学部における専門教育の一環として、農業生産に関する研究と実習教育を行っています。

夏 は暑くて、冬は寒い職場。「体全部で季節を感じる仕事です。自然の時間に合わせて生活できるので、僕にとってはそれがいいんです」と語るのが、香川大学農学部附属農場で働く片岡さん。附属農場は、農学部の教育と実験の現場として位置づけられていて、片岡さんたちはこの管理を任されています。管理といっても相手は農園。一般の農家と同じように四季折々の農作物を育てているため、季節を体で感じる職場ということになります。

片岡さんは働き始めて4年目。担当は果樹園で、主にぶどうやみかん、桃、柿などを育てているそうです。ここで収穫された作物は最終的に学内で販売されたり、地元市場に卸したりします。その収入が附属農場の運営費の一部でもあるため、品質に対する責任は重大。自然を相手にした毎日の努力が欠かせないのです。その品質について片岡さんが心がけていることは「毎年同じものを作ること」。前向きな片岡さんにしては少し意外な感じがしましたが、実はこれが農作物の大きな課題の一つ。天候というのは毎年同じではありません。気温の変化や降雨量が変われば、果実の大きさや味、色つきなどが変わってきます。そういうわけですから、毎年同じレベルのものを作り続けるというのは最高水準の技術が必要になります。「農作物にも産地の名前が付いたブランドがありますが、あれは高いレベルのものを、毎年コンスタントに出荷できるといふことなんです。僕の夢は、この作物がブランド化されるようになることです」。

そんな片岡さんの一番うれしい瞬間は収穫の時。「自分で育てたものを食べる喜びというのは最高です。これは何度味わってもいいですね」と顔を綻ばせます。「農作物のいいところは、努力が目に見えることですね。手をかければ手をかけるほどいいものができますから」。しかし、それだからこそ恐ろしいのが台風。場合によっては、すべての努力を水の泡にしてしまうこともありま

木を見るだけで
状態がわかるようになり
たいんです。

片岡裕貴

PROFILE

かたおか ゆうき
農学部附属農場
技術職員



柿に加えてみかんも収穫時期。忙しいけれど充実した時間です。



品質を確認しながら慎重に振り分けます。



一つひとつ丁寧に収穫しています。